

## -今回は薬とは無関係の話- ぼけ老人の話



**母方の祖父Gさん**は、かつては学校の教師をやり、洋画の他に墨絵も描いていた。厳格な性格であったが、ひょうきんな一面もあり皆を笑わせていた。また女性にもてたので祖母のBさんを相当困らせていたようだ。そんなGさんも晩年は今で言う認知症になっていた。にこやかな表情だったが、どこか不安げな表情でGさんは私の話を聞いていた。どこかで会った人だ。しかし名前を思い出せない。自分にすごく親しげに話をしているから、自分とはかなり親密な関係なのだろうが、自分との関係が分からないままだった。何とか対応できていたが、それも限界を迎えた時に、照れ笑いの表情を浮かべながらGさんは私にこう言った。「あなたは、どなたさんでしたかね?」。私は「あんたの孫だよ」と答えた。遠くで暮らしていた祖父はやがて寝たきりとなり、しばらく経って亡くなった。私はGさんが死んだ時、何の符合か急性腹症で遠い地の病院に入院していたためGさんの葬式には出られなかった。

**時は過ぎていく。**祖母のBさんは持病の心臓病の悪化で突然に亡くなった。Bさんは最期まで頭はクリアだった。その時以来、母のKさんはこう言うのが常となった。「私はGさんの様にはなりたくない。母のBさんのようにコロっと死にたい」と。心情は理解できた。誰しもそう思うだろう。子や孫の名前や存在も認識できないまま、寝たきりとなって周囲に面倒をかけまくる存在にはなりたくない。

当時は家族が寝たきりとなると、家族の誰かがお世話のために犠牲になった時代だ。今でもそれは変わらないという人もいるだろうが、2000年にできた介護保険制度はそれなりに意義があり、後に私達家族は、それを存分に利用させてもらった。

**さらに時は過ぎていく。**Kさんの繰り返し話が多くなってきた。1ヶ月はもつはずの白内障用の点眼薬が1週間も持たずに無くなった。その度にKさんは近くの眼科へ行き点眼薬をもらってくるようになった。眼科医は文句を言うが、ついさっき点眼したことを忘れて1日に何度も点眼しているという話を父のTさんから聞いた。やがて1日に何度も近くのスーパーに買い物に行き、特に卵、豆腐、牛乳が冷蔵庫にいっぱいになるようになった。Tさんは足が悪く、足の早いKさんを追いかけて制止することができなかった。Tさんはいっぱいになった冷蔵庫の中の食品を見て、Kさんを叱りつける。Kさんは何故叱られているのか分からないので、直後は精神的ストレスばかりかかっていたが、直ぐに忘れて又買い物に出かける。逆に暖簾に腕押し状態のTさんのストレスは貯まるばかりだった。

**ある日の夕刻のことだった。**Kさんが“富山の鱒の寿司”を我が家にお土産と言って届けてくれた。その直後に普段から冷静なTさんが不安感を隠そうともせずに私を訪ねてきた。「今日、いつものように午前中に眼科へ出かけて行ったが、数時間も帰ってこなかった。どうやら金沢まで電車で行って来たらしい」というのだ。眼科医の近くには旧JRの支線駅があり、時刻表と照らし合わせると辻褄が合うという。Kさんの言葉の端々に「金沢」が出てきたとTさんは言った。

ただごとでは無い! ついに我が家にもやってきた! と思いながら、病院の高令診療科を受診する。結果は軽いアルツハイマー病というのでアリセプトが処方された。元銀行員のTさんは几帳面な夫だったので、おそらく正確に薬をKさんに飲ませていたのだろう。夫婦間で何があったか分からないが、Kさんは胃潰瘍で入院し、それからアリセプトは中止となった。

**やがてTさんは、癌が再発し帰らぬ人となった。**私が彼の病室を去る時、私にかけた最期の言葉は「たまにはKさんの様子を見ておいてくれ」だった。Tさんが死にKさんの認知はさらに悪くなった。

日中はデイサービスを利用して何とか生活を保てたが、翌日施設に持参するバッグが朝の忙しい時に見つからないことがしばしば出てきた。Kさんはそれが大事なものだと思って、必ずどこかへ仕舞い込むのだ。同じ場所に仕舞ってくれるなら問題はなかったが、毎日のようにその場所は変わっていた。「バッグはここに置いておくこと」とバッグに貼り紙をしても、何を言っても効果は無かった。身近に認知症の人がいると自分の性格がますます悪くなるのを実感した日々だった。

**ある日の夜会議をしていると、**近所の人から電話があった。Kさんを預かっていると。どうやら近所ではKさんの徘徊は有名になっているようだった。その後、家にいてくれといっても勝手に出歩くことが多くなった。小雨の中を30分以上も歩き、何故か自分で警察署にたどり着いたKさんが警察に保護された時もあった。様々な徘徊騒動が続いたためグループホームに入ってもらうことにした。その頃のKさんは頭の中で何故自分はここにいるのだろうか？とか、何をしていたのだろうか？と自問自答するが解決できず苦しんでいたことだろう。それでも何に苦しんでいたか自体をすぐに忘れていただろう。

**グループホームに入所当時は**私を息子と認識してくれていたが、直近の出来事は忘れ、同じ話を繰り返す状態はどんどんひどくなっていった。表情は穏やかだったが、照れ隠しのような表情が多くなった。こちらの言うことが分かった振りをしているようだった。やがて私を息子と認識してくれなくなった。かつてKさんはいつも「私はGさんのようになりたくない」と言っていたが、そうってしまった。

月に1、2回しか会わない状態が続くと、施設の関係者にはにこやかな表情を浮かべるが、私が訪ねると警戒の表情を浮かべるようになってきた。その時、中学校の担任が「Kさんがお前を怖がっていたぞ」と私に言った話を突然思い出した。久しぶりに遠くの親戚がやってきた。数年ぶりの再会だった。私達が話しかけると昔を思い出して復活するかもと冗談を言っていた彼女たちもKさんと対面して大いにショックを受けた。久しぶりに会う他の親戚達の反応は皆同じでショックを受けて帰って行った。

**息子や孫達を認識できなくなって十年以上が過ぎた。**アルツハイマー病なら寝たきりになっても不思議ではなかったが、何故か寝たきりにはなっていなかった。別のタイプの認知症かと思っていた頃に、軽い吐血があった。入院して調べたところ胃に明らかな出血部位はなく、脆弱化した胃粘膜から血液が少しずつ滲み出して酸素や茶と反応して胃内に溜まり、酸化鉄かタンニン酸鉄を含んだ赤黒い液体を吐き出していたようだ。しかし症状は安定していた。1週間程度貧血治療の入院をしてから退院し、元の安住の地であるグループホームに戻るはずだった。入院して間もない早朝に病院から電話があった。急いで病院に駆けつけた時間がKさんの死亡時刻となった。既に急性心不全でなくなっていたのだ。

**GさんやKさんが最初におかしな行動をし始めた年齢**が間近に来ている。すぐそこだ。5年も経たずにやってくる位置にまで私は来てしまった。私もGさんやKさんのようになりたくないと思い始めて既に何年も経っている。彼らの連れ合いは皆死ぬ間際まで頭はクリアだった。遺伝子レベルではGさんやKさんの認知症に関わる遺伝子は、世代を経るたびに私の中では希釈されているかもしれないという淡い期待を持ちながら今を生活している。

**私を息子と認識できなくなって以降の長い期間のKさん**を、まるで操り人形のような生活だと評していた私をKさんはどう思っていただろうか？もしKさんに外には表現できない意識があったならばKさんは私を薄情な息子だと責めたかもしれない。同じ長生きをするのであれば健康で無くても良いから、せめて外の人達とコミュニケーションがとれる老いを迎えたいと願っているが、私もGさんやKさんがたどった『外に自分の意志を発信できなくなる』同じ道を歩き始めているのかもしれない。

(終わり)